

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

言語学会の機関誌『言語学雑誌』の資料的価値について：日本における近代言語学史の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-10-18 キーワード (Ja): 言語学会, 『言語学雑誌』, 近代言語学史, 藤岡勝二, 岡田正美 キーワード (En): 作成者: 柿木, 重宜 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000025

言語学会の機関誌『言語学雑誌』の資料的価値について

— 日本における近代言語学史の観点から —

柿 木 重 宜

要 旨

本稿では、日本における近代言語学史の観点から、言語学会の機関誌『言語学雑誌』の資料的価値について考察した。本雑誌の考察については、これまで、様々な言語学的観点から検討を試みたが、未だ全貌を解明するには至っていない。

上記の考察の結果、当時の『言語学雑誌』は、比較言語学、音声学等のような現代言語学の研究対象を包含すると同時に、国語国文学、梵語学等の他分野の研究も対象にしていたことが判明した。また、「待遇表現」研究、アイヌ語等の個別言語学の研究もすでに行われている。『言語学雑誌』は、18冊だけしか刊行されていないが、日本における近代言語学の誕生にとって、貴重な論考が多数寄稿されているのである。本雑誌は、「博言学」から脱し、新しき「言語学」という学問が誕生する過渡期中で成立している。現代言語学界の成立過程を知る上で第一級の学術雑誌であり、今一度見直されるべき資料的価値を有する文献なのである。

キーワード：言語学会、『言語学雑誌』、近代言語学史、藤岡勝二、岡田正美

1. はじめに

本稿では、日本における近代言語学史の観点から、言語学会の機関誌『言語学雑誌』の果たした役割について、詳細な考察を試みた。『言語学雑誌』の様々な言語特徴を調査して、言語学という学問が、現代言語学と異なり、他の学問分野、例えば、国語国文学、サンスクリット学といった研究分野を包含しながら、徐々にその輪郭を確立していく過程を詳らかに検討した。そして、言語学会の機関誌として刊行された『言語学雑誌』が、「言語学」に関わる学術雑誌のメルクマールとして、頗る資料的価値を有する雑誌であることを論証したいと考えている。

日本における「言語学」は、かつては「博言学」と称されていた。東京大学初代総理の加藤弘之（1836 - 1916）が、「博言学」と命名した学問であったが、お雇い外国人教師バジル・ホール・チェンバレン（1850 - 1935）の弟子であった上田萬年（1867 - 1937）が、ドイツ、フランス留学を経て、日本において「言語学」という新しき学問分野を樹立したのである。そして、明治31（1898）年に、彼の弟子を中心に結成されたのが、言語学会である。本学会は、明治33（1900）年2月に『言語学雑誌』を創刊した後、明治35（1902）年の9月に至るまで、第1

卷（第10号）、第2巻（第5号）、第3巻（第3号）を刊行した後、実に短い期間であったが、その使命を終えることになる。しかしながら、これ以降、「言語学」という名称は、今日まで連綿として使用され、次第に定着していく。勿論、当時の言語研究は、決して、現代言語学の研究テーマと合致しているわけではない。

筆者は、これまで拙論（2017a）や拙著（2017b）をはじめとする論考において、『言語学雑誌』を研究対象として扱ってきたが、未だその重要性の全貌を解明できなかった。日本における近代言語学の黎明期において貴重な学術雑誌でありながら、『言語学雑誌』の研究が途上段階であることは、言語学史においても由々しき問題であり、喫緊に解決すべき重要な課題といえる。

上述したように、本稿の目的は、『言語学雑誌』の様々な言語特徴を明らかにすることによって、日本の近代言語学史における『言語学雑誌』の果たした役割を明確にして、本雑誌の資料的価値を論証することにある。さらに、『言語学雑誌』が、現在まで連綿として続く「言語学」の原点ともいえる貴重な資料であることを指摘したい。現代の日本語学界では、「日本語学史」という研究テーマが確立されているにも関わらず、日本における言語学史の研究は遅々として進捗していない。現代の言語学界で最も知られている日本言語学会が、昭和13（1938）年に創設され、現在に至るまで連綿として継続しているが、言語学の源流を明らかにすることは、きわめて重要な研究テーマであるといえよう。

本稿を通して、近代言語学史の黎明期において、『言語学雑誌』が頗る資料的価値を有する文献であることを論証したい。

2. 言語学会と機関誌『言語学雑誌』について

2.1 言語学会の誕生

1章でも述べたように、言語学会は、明治31（1898）年に、東京帝国大学文科大学博言学科教授の上田萬年が、自らの弟子を中心に結成した学術機関のことである。門下生として、小川尚義（1869 - 1947）、金澤庄三郎（1872 - 1967）、藤岡勝二（1872 - 1935）、新村出（1876 - 1967）、保科孝一（1872 - 1955）、八杉貞利（1876 - 1966）等、後の言語学の礎を築く錚々たる人物が、当時は、まだ一言語学徒として参加している。そして、この2年後に、機関誌『言語学雑誌』が刊行されるのである。言語学会の機関誌は、既述したように、第1巻は第10巻、第2巻は第5号、第3巻は第3号と、徐々にペースは落ちていくが、計18冊の言語学の専門雑誌を刊行したことになる。現代の学会の機関誌のペースを考えると、非常に短い間で、きわめて質の高い雑誌を発行したことになる。

言語学会の設立の経緯であるが、この点については、拙著（2017b：9-16）においてかなり詳細に考察をした。機関誌『言語学雑誌』が創刊される前から、かなり周到に、言語学会の設

立、機関誌の発行の準備がされており、それは、八杉の当時の日記である『新縣居雜記』（吾妻書房、1870）でも窺うことができる。後のロシア語学の泰斗八杉は、当時は、東京帝国大学文科大学博言学科の一言語学徒であり、毎日の出来事を、正確に日記に書いていた。この日記を丹念に読みこんでいくと、上田が、当時、文部省専門学務局長をはじめとする政府の要職を務め、かなり多忙な状況にあったことが分かる。一方、この頃すでに、上田の代りに『言語学雑誌』の実質上の精神的支柱であったのが、第二代東京帝国大学文科大学言語学科教授の藤岡勝二であった。藤岡は、東京帝国大学文科大学博言学科出身であり、上田にその言語学の才を認められ、卒業後すぐに、大学院に進学することを許可されている。そして、藤岡は、明治38（1905）年に、東京帝国大学文科大学言語学科を、上田から譲りうけることになる。勿論、本雑誌には、上田自身も論文を寄稿しているが、それは、刊行より、かなり以前に執筆されたものであったと考えられる。『言語学雑誌』は、藤岡、新村、八杉が、学会設立以前から、用意周到に準備を進めていたのである。現代まで続いている「言語学」という名称であるが、言語学会が休会した後も、徐々に定着していくのであるが、言語学という名を冠した学会が設立されるまでには、昭和13（1938）年2月まで俟たねばならなかった。この際に結成された学会が、爾来、現在まで継承されている日本言語学会のことである。第1回日本言語学会の会長は、新村出、副会長は、藤岡勝二の東京帝国大学文科大学言語学科を継いだ小倉進平（1882 - 1944）が務めている。昭和10（1935）年に逝去した藤岡勝二は、終に、新しき言語学会を見ることは叶わなかった。言語学会が休会になった後も、藤岡は、学会の設立を模索したが、終に果たすことができないまま逝去する。藤岡の東京帝国大学文科大学博言学科の後輩になる新村出、金田一京助（1882 - 1971）は、その名が冠された華々しい賞が残されているにも関わらず、日本における言語学界では、藤岡勝二の名は、日本語とウラル・アルタイ語族との共通性を唱えたことだけで知られているに過ぎない¹⁾。日本語系統論、アルタイ諸語の文献研究、ローマ字化国語国字運動、辞書学、サンسكريット学等、実に多彩な研究テーマを有した藤岡は、現代言語学界では、忘れられた言語学者かもしれないが、その言語思想は、東京帝国大学文科大学言語学科の門下生によって受け継がれていく。藤岡のアルタイ諸語文献研究は、彼が、東京帝国大学に勤務していた頃に、副手として起用した服部四郎（1908 - 1995）が受け継いでいる。後に、服部は、東京大学の言語学科、否、日本の言語学界を牽引していくことになる。また、藤岡勝二の辞書学や音声中心の言語思想に多大なる影響を及ぼした言語学者に、ウィリアム・ドワイト・ホイットニー（1827 - 1894）を挙げるができる。彼の思想の影響を受けたのが、近代言語学の祖フェルディナン・ド・ソシュール（1857 - 1913）である。ソシュールの没後、弟子によって刊行された『一般言語学講義（当初のタイトルは言語學原論）』は、藤岡の直弟子小林英夫（1903 - 1978）によって、翻訳されている。小林の「言語道具説」は、京城帝国大学時代の同僚であった国語学者時枝誠記（1900 - 1967）の「言語過程説」のよう

なアンチ・テーゼの言語思想を生み出す契機になった。さらに、藤岡は、『大英和辞典』第1巻、第2巻（大倉書店、1935）の編集にも携わったが、彼の英語学研究を受け継いだのが、市川三喜（1866 - 1970）である。こうして、『言語学雑誌』の精神的支柱である藤岡勝二の思想は、確実に、彼の門下生によって継承されていった。

上述してきたように、言語学会とは、バジル・ホール・チェンバレンが築いた「博言学」から脱し、新しき学問領域の名称として「言語学」という名を冠した学会として、注視すべき学術機関とみなすことができる。勿論、その輪郭は、この時点では、未だ明確にはなっていないが、現代言語学にも相通じるテーマをタイトルにした論考もみられる。この頃の言語学会の結成の意義は大きく、近代言語学史において、言語学会の創設は、日本における近代言語学の誕生といっても過言ではない。

2.2 『言語学雑誌』の果たした役割

拙著（2013）においても、『言語学雑誌』について詳細に調査したが、原著の目的は、あくまで、言語学者藤岡勝二が、近代日本の「国語」が成立する過程において、どのような役割を果たしたのかということをはっきりと明らかにすることであり、近代言語学史に関する著書ではない。この点を考慮して、その後、『日本における近代「言語学」成立事情 I』（ナカニシヤ出版、2017b）を上梓した。近代の「言語学」が成立した事情を考察しながら、『言語学雑誌』の重要性にふれ、近代言語学における本雑誌の果たした役割を明らかにしようとしたが、「論説」の内容については、全貌を解明することができなかった。その後も、拙論を通して、『言語学雑誌』の実態を検討してきたが、わずか18冊の雑誌とはいえ、これほど近代言語学史において、多大なる影響を及ぼした資料はみられない。本稿においても、未だ実態が判然としない箇所を、徐々にではあるが、明らかにしたいと考えている。

筆者は、『言語学雑誌』の実質的役割を果たしたのは、言語学会の創設者上田ではなく、彼から言語学講座を継承した藤岡勝二であると考えている。藤岡は、本雑誌の編集人であり、東京帝国大学文科大学言語学科主任教授を、唯一人で、講師時代を含めると25年余も務めている。明治33（1900）年以前に、藤岡を中心に、すでに学会創設の話が進められており、彼こそが、本雑誌のまさに中心的存在であったとみなすことができるのである。

藤岡は、本雑誌の編集人、実質上の編集責任者を、ドイツ留学中にも関わらず、明治35（1902）年の第3巻第3号の最終号に至るまで務めあげ、現在の言語学の礎を築いた。既述したように、藤岡のこの頃の果たした役割は、八杉貞利が日記で残し、後に弟子の和久利誓一（1912 - 2001）が復刊した『新縣居雜記』によって窺うことができる。筆者は、これまで『言語学雑誌』に掲載された論説について、その資料的価値を指摘してきたが、まだ詳らかになっていない箇所も多数みられる。拙稿（2017a:4 - 7）では、『言語学雑誌』の言語特徴を扱い、さらに、拙稿（2017a:

8) では、『言語学雑誌』の体裁について調査して考察を試みた。その結果、当時の名称は、現在の学術雑誌なら、概ね次の括弧に該当することが判明した。

論説（学術論文）

雑録（研究ノート）

史傳（歴代の国語学者や言語学者の紹介）

雑報（学会や研究会等の動向）

紹介並に批評（言語学関連書の紹介及び書評）

質疑応答（言語学に関する読者からの質問とその回答）

現代言語学、日本語学に関わる学術雑誌と該当する箇所は、論説、雑録、雑報、紹介並に批評であるが、質疑応答については、学術雑誌では、通常、掲載されることはない。あえて、この欄に近い箇所を設けている専門雑誌を掲げるとすれば、現在休刊中の『月刊 言語』（大修館書店、2004）のチャレンジコーナーが考えられる。「ジュニア版」、「シニア版」に難易度を分類して、言語学に関する問題を取り上げ、読者の回答を評価する内容であった。『月刊 言語』は、一般書店でも購入できる雑誌であったが、掲載される論文は、一般の学術雑誌と同様に、頗る難解な学術的な論文が多数みられた。筆者も、このチャレンジコーナーを、平成 16（2004）年第 33 卷 3 月号から 8 月号まで担当したことがあったが、本雑誌のコーナーは、読者との質疑応答に近い形式の内容であった。また、拙稿（2017a：9）では、取次書店の一覧を明記し、学会の機関誌でありながら、一般の書店にも流通していることを指摘した。さらに、拙稿（2017a：11-12）では、『言語学雑誌』の主要な分野別リスト（著者・研究分野・巻号数・題目及びジャンル）を掲げ、そのリストの中には、比較言語学、音声学等の今日の現代言語学に通じるテーマの論文と同時に、国語学、サンスクリット学等、明らかに現代の言語学の分野とは異なる論文まで包摂されていることが判明した。しかしながら、この折に調査できたのは、第 1 巻だけの内容であり、第 2 巻、第 3 巻や、研究者の詳細な言説までは、紙幅の関係上、十分に考察できなかった。また、その言説であるが、拙稿（2017a）では、あくまで言語学者藤岡勝二の論考を枢軸として取り上げたため、他の研究者の言説まで言及することができなかった。

こうした事情に鑑みて、拙稿では、さらに詳しい検討を試みたいと考えている。勿論、今回も紙幅の関係上、充分に取り上げられない内容もあるが、その場合は、稿を改めて論じたい。

なお、『言語学雑誌』は、これほど重要な資料でありながら、本格的な先行研究は、山本（1967）の『言語学雑誌』と言文一致との関係性を指摘した論考だけしか知られていない。『言語学雑誌』をタイトルにした論文は、比較的最近の論文に限定すれば、拙稿（2017a）以外に、木村（2003）の論考しかみられない。

3. 『言語学雑誌』が射程とした研究テーマについて

本章では、『言語学雑誌』が扱った学問分野を取り上げ、現代言語学の研究テーマの類似点と相違点を明らかにしたい。先述したように、『言語学雑誌』では、現代言語学においても扱う言語分野もみられるが、中には、国語国文学、サンスクリット学等、異分野の研究論文も散見できる。

拙稿（2017a）や拙著（2017b）では、『言語学雑誌』に寄稿された論文について考察したが、本稿では、その際に詳細に検討できなかった分野の内容を中心に取り扱うことにした。

3.1 待遇表現について

本節では、国語学者岡田正美（1871 - 1923）が、『言語学雑誌』に寄稿した「待遇法」という論文に注目したい。

岡田は、藤岡勝二、保科孝一とともに、明治31（1898）年2月に、図書館嘱託の発令を受け、同年、4月には、「国語」に関する事項取調の嘱託を任じられている。後に、藤岡は言語学の礎を築き、保科は上田とともに、東京帝国大学国語研究室において、「国語」の概念の樹立に尽瘁していく。この頃は、この三名が、「国語」の理念、国語国字問題について議論を重ねていたのである。なお、岡田が、『言語学雑誌』に寄稿したのは、第1巻第5号「待遇法」（pp.32 - 39）、第1巻第6号「待遇法（續）」（pp.18 - 29）である。

「待遇」という用語自体は、管見の限りでは、解剖学者の大沢岳太郎（1863 - 1920）が上梓した『日本婦人待遇論』（南江堂、1898）というタイトルでもみられるが、現代言語学につながる「待遇」を意味する用語ではない。後の日本語学、言語学の分野で使用される「待遇」は、やはり、岡田の論文を嚆矢と捉えることができる。

一方、待遇表現の研究は、現代言語学の須要な研究テーマであり、この分野は、現代の politeness 「ポライトネス」の理論にも関連する研究テーマとして扱うことができる。また、現代日本語学においても、「待遇表現」に関する研究は、積極的に行われている。

現代言語学においても、主要な研究テーマである「待遇表現」ではあるが、岡田がこの頃すでに、「待遇法」と題して、『言語学雑誌』に寄稿していたことは特筆すべき事項といえよう。

なお、岡田（1900b：18）は、『言語学雑誌』第1巻第6号の論文の冒頭で、次のようなことを述べている。

敬語法、謙讓法、倣語法、卑語法、をあらはしするには、現今の口語におきましては、種々の方法が御座います。少しく、うるさいやうにも見えませうが、類をわかち、種をわかちまして、次々に、例を列擧して、御目にかけませう。

第1 待遇法を異にするに従ひて、夫々に相當する異なる言詞を用ゐるもの（未定稿）

上記のように述べ、名詞、代名詞、動作言、存在言、状態言、副詞、接続詞を、(1)～(7)に分類しながら、諸例を掲げている。

例えば、岡田（1900b：26）は、「動作言」の項目において、次のように、「食べる」という言葉を掲げながら、敬、平、謙、倣、卑という分類をして、様々な場面での言葉の用法をまとめている。

なお、敬は敬語、平は平常の語、謙は謙讓語、倣は傲慢な言い方、卑は卑語に該当する。以下に、まとめると次のようになる²⁾。なお、括弧は、筆者が後で施したものである。

表1 岡田正美の「待遇法」の例

敬（敬語）	めしあがります
	あがります
	めしあがる
	あがる
平（平常の語）	くふ
	たべる（食）
謙（謙讓語）	いただく
	いただきます
	たべます
倣（傲慢な言い方）	たべてやる
	くってやる
卑（卑語）	くらふ
	ばくつく

現代言語学の観点からみると、確かに、当時の岡田（1900b）の『言語学雑誌』における「論説」は、稚拙な論文と捉えられるかもしれない。しかしながら、今日の待遇表現研究の先駆的な論考として、十分に評価できる。

3.2 個別言語学の研究—とりわけアイヌ語を中心にして—

本節で、注目したい『言語学雑誌』の論文の研究テーマは、この頃、すでに個別言語学の研究が行われていたことである。

まず、ここでは、既述した後のロシア語学の泰斗八杉貞利（1900：39）が、『言語学雑誌』

第1巻第6号の「雑録」において、「アイヌ語断片」という論考を寄稿していることに注視したい。当時の八杉が、これほどまでに、アイヌ語に関心を抱いていたことは瞠目すべき事項といえよう。

以下に、その冒頭箇所を記すことにしたい。

アイヌ語断片

八杉貞利

左に掲載するは、余が採録せる「アイヌ」土語（沙流方言）譚話の二三にして、理學博士神保小虎先生の訂正を請ひたるものなり。「アイヌ」語口碑は、既に亞細亞協會報告の上に、「バッチェラー」氏の寄稿せるもの多くありて、今更用無きに似たれど、なほ斯語研究者が閑讀の料にもと思ひて之を載せたり。

本文綴字法は暫く「バッチェラー」氏に従ふ。

このように記した後、八杉（1900：40-44）は、「義経のはなし」の全文をローマ字表記のアイヌ語に翻訳して、『言語学雑誌』に寄稿している。

なお、ここで、八杉が掲げた「バッチェラー」とは、宣教師ジョン・バチェラー（1854 - 1944）のことであり、当初は、宗教の普及が目的で日本を訪れていたが、北海道においてアイヌ語とアイヌ文化に魅せられるようになる。キリスト教の普及と同時に、アイヌ語で、様々な物語をローマ字で表記をしている。特に、バチェラーは、「ローマ字ひろめ会」の機関誌『RÔMAJI』に、ローマ字表記のアイヌ語で訳した物語を数多寄稿しており、ローマ字化国語国字運動にも賛同を示していた。バチェラーのアイヌ語の業績はかなり知られているが、彼が日本においてローマ字化国語国字運動の理論と実践面を支えた業績については、未だ進捗しているとはいえない。この点については、国語国字問題における今後の検討課題といえる。

さらに、アイヌ語の重要な研究者として、理学者神保小虎（1867 - 1924）を挙げることができる。神保（1900：1-5）は、『言語学雑誌』に「アイヌの日本語」を寄稿しており、日本人のアイヌ語研究のパイオニアといえる存在である。しかしながら、彼の専門は地質学、鉱物学であり、『言語学雑誌』に自らの論文が発表される頃には、すでに東京帝国大学理科大学教授として、後進の育成に尽力していた。神保は、アイヌの言語、文化、社会に強い関心を抱き、アイヌ語研究を進めようとしており、実際に、アイヌ語の授業を担当していた。しかしながら、当時すでに、地質学、鉱物学の分野でも、中心的存在であったため、アイヌ語の研究は断念せざるを得なかったのである。そして、当時、東京帝国大学博言学科の一言語学徒であった金澤庄三郎に、アイヌ語を教え、『アイヌ語會話辞典』（金港堂書籍、1898）という辞典を、理学博

士神保小虎は、文学士金澤庄三郎と共同編者として、刊行している。神保は、アイヌ語の後継を金澤庄三郎に託そうとしていたのである。

次の冒頭の文章から、すでに、金澤庄三郎（1898:3）が、アイヌのフィールドワークを行っていたことを窺うことができる。

本書は余が理學博士神保小虎先生の教を受けアイヌ語研鑽の餘材を以て編纂せるものにして將來北海の地に入らんとするものを便し兼ねては東北諸國語比較研究の資料たらんことを期す先生の學に専らなるは夙に世の知るところにしてアイヌ語のためには特に巨多の私貨を投じ斯學の研究を推奨されしこと一にして足らず恩師上田萬年先生亦研究の方針に付きて幾多の貴重なる注意を與へられたりき本書のなれる實に兩先生の賜なり

以上の金澤の冒頭文の言葉から窺えるように、神保小虎と師の上田萬年は、金澤庄三郎のアイヌ語学者としての将来を嘱望していたのである。しかしながら、金澤は、後に、朝鮮語に魅了され、終には『日韓兩國語同系論』（三省堂書店、1910）を上梓することになる。本著で論じた「日本語と朝鮮語の同系論」は、言語政策的観点からみれば、朝鮮との同化政策を推進していた日本帝国主義国家にとって、きわめて都合のよい解釈ができる学説になってしまったのである。これ以降、金澤は、研究の射程を、アイヌ語から日本語と朝鮮語の系統関係に移すと同時に、生涯をかけ『広辭林』の辞書編纂にも尽瘁することになるのである。

ここで、神保小虎の実弟であり、著名な音声学者で、東京高等師範学校教授の神保格（1883 - 1965）についてもふれておきたい。藤岡勝二がローマ字化国語国字運動において、最も信頼を寄せた直弟子であり、藤岡の多彩な研究テーマの一つであるローマ字化国語国字運動の後継者とみなすことができる。神保格は、実兄小虎が、無文字社会のアイヌ語を音声だけを頼りにしながら、ローマ字で表記をしたアイヌ語研究を間近に見て、辞書のない状況で、このような作業がいかに大変労力がある作業なのか、知ったことであろう。同時に、こうした経験を通して、文字は、社会言語学的観点からみれば、prestige「威信」を有するが、言葉の本質はあくまで音声にあり、神保は、音声の重要性について改めて気づき、音声学という学問に傾倒していったことが想起できる。

ここで特記しておきたい事項は、上田萬年が、留学中に、ドイツ、フランスの大学において、比較言語学を学び、帰朝した後、すぐに東京帝国大教授に就任して、当時の博言学科の学生たちに、青年文法学派の最新の理論を教えたことである。上田は、自らは、日本語系統論の論文を一篇も書いていないが、比較言語学の音韻対応の理論を援用すれば、日本語の系統を解明できることを希求していた。そして、自らの弟子たちに、日本語と affinity「類縁性」の可能性

があると想定できる言語を学ばせたのである。当初は、八杉、神保、金澤がアイヌ語を研究対象としていたが、金澤が、朝鮮語を通して、日本語系統論の研究を試みようとしたため、アイヌ語研究は、この時点で頓挫していた。

上田だけではなく、当時の言語学徒たちが、消滅しようとしたアイヌ語に危惧を感じていたことは、次に掲げる『言語学雑誌』第1巻第6号の文からも窺うことができる³⁾。

○「アイヌ」語の現在

前代の國民であった「アイヌ」民族の言語は、今や絶滅の運に向て居る。

上記の文から窺えるように、滅びゆこうとするアイヌ語の研究は、喫緊の課題であった。上田は、そうした重要なアイヌ語研究を、金田一京助に託したのである。

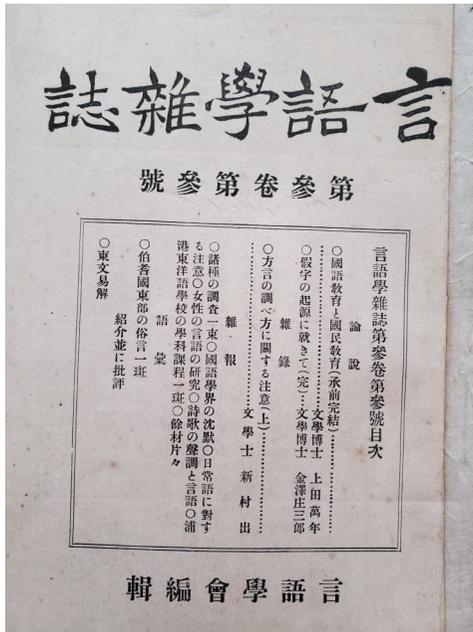
なお、本雑誌のアイヌ語の研究について、木下子之吉の「『國語』に似たるアイヌ語」などの論文も散見できるが、最終的には、後にアイヌ語の泰斗として知られる金田一が、アイヌ語研究を継承する。アイヌ語研究の碩学金田一京助も、この頃は、特にアイヌ語だけに深い関心を寄せていたわけではなかった。他の言語学徒同様に、青年文法学派の言語学者の理論を学んでいたが、上田の命を受けて、生涯をアイヌ語研究に捧げ、尽瘁していったのである。

一方、八杉は、上田からロシア留学を勧められおり、明治34(1901)年にロシア留学を果している。藤岡勝二と八杉貞利という『言語学雑誌』の中心となる人物の留学によって、日本における言語学会の実質的な役割は、新村出だけが引き継ぐことになる。明治35(1902)年には、終に、言語学会は、『言語学雑誌』の存続を断念し、休刊を余儀なくされるのである。藤岡、八杉の留学も『言語学雑誌』の継続を困難にした理由といえよう。

また、ここで特筆したい事項は、『言語学雑誌』は休刊、結果的には廃刊、言語学会も散会するのであるが、第3巻第3号の最終号において、新村出(1902:32-51)が「方言の調べ方に關する注意(上)」を「雜録」に寄稿していることである。その内容は、1.「方言といふ名義」、2.「方言調査の参考書類」、3.「方言調査上諸般の注意」、4.「方言の寫し方」という順で、方言調査方法を4つに分類して、緻密な分類方法論を説明しながら、最後に、方言をローマ字で写すことの有用性について、次のように記している⁴⁾。

その他、撥音のンを寫す場合の如きも、必ずしも在來の習慣に依らずとも、其地方の發音に應じて、精確に寫すべきである(次號完結)

上記の最後の箇所、(次號完結)から窺えるように、新村は、第3巻第3号以降も、『言語学雑誌』に、方言の調べ方に関する論文を寄稿しようとしたのである。



『言語学雑誌』第3巻第3号（最終号）

本節では、アイヌ語を中心に考察してきたが、『言語学雑誌』には、台北帝国大学教授小川尚義が、『言語学雑誌』第1巻第6号に「厦門語族に就て」を寄稿し、さらに、同雑誌の第2巻第2号では、「ファボラング語に就て（承前、完結）」という台湾諸語に関する先駆けといえる研究成果を残している。小川の功績については、稿を改めて論じてみたい。

4. 『言語学雑誌』の言語特徴について

4.1 『言語学雑誌』第2巻と第3巻の主要分野について

本節では、拙著（2017b:16）で挙げるができなかった『言語学雑誌』第2巻と第3巻に寄稿された著者、研究分野、巻号数、題目の表を掲げることにした。

第1巻では、10冊の雑誌が、わずか1年で刊行されたが、第2巻、第3巻では、どのような状況であったのか考察したい。拙論（2017a）では、第1巻の『言語学雑誌』の研究テーマを詳細に検討することによって、当時、すでに、言語学に関わる分野として、比較言語学、音声学、各諸言語に関する研究、方言研究が行われていたことが判明した。また、現代言語学の学術雑誌では扱われることのない国語学、近世の国学者の研究も多数寄稿されていた。また、当時の国語国字運動の影響を受けた研究論文も散見できたのである。そして、瞠目すべき事項として、サンスクリット学の泰斗であり、東京帝国大学文科大学教授高楠順次郎（1866 - 1945）が、『言語学雑誌』第1巻第2号から第5号まで、「日本字書の完成」という論文を寄稿

していたことである。これは、『言語学雑誌』の中心的存在であった言語学者藤岡勝二が、教西寺という京都の古刹で生まれ、サンスクリット学に精通していたことと無縁ではない。藤岡は、当時、サンスクリット学者として知られていた高楠順次郎と友誼を結ぶ間柄にあり、長らく東京帝国大学文科大学教授としても、親しい同僚であった。藤岡の言語学の素養は、まずは、サンスクリット学から始まり、次第にインド・ヨーロッパ語族を中心とした比較言語学の理論へと関心が移り、本格的に言語学を学んだと考えられる。

では、以下に『言語学雑誌』第2巻、第3巻の主要な分野別リストを考察したい。

拙論(2017a: 11-12)では、『言語学雑誌』第1巻の主要な分野別リストを作成したが、現代言語学に通じる学問分野、例えば、比較言語学、音声学、個別言語学の研究、方言研究以外に、国語学、近世国学者の研究、国語国字問題、サンスクリット学等、実に多彩なジャンルの研究テーマが含まれていることが分かった。

本稿では、さらに、『言語学雑誌』第2巻、第3巻の主要な分野別リストを考察した。その結果、今回の調査でも、題目と研究内容を考察すると、現代言語学以外の研究テーマも、数多く見出すことができた。一方で、個別言語学の研究等は、現代言語学でもみられる研究テーマであり、ヘンリー・スウィート(1845 - 1912)の英語教授法は、音声学の理論が基になっており、言語学との関連性が深い分野と考えられる。なお、第2巻、第3巻でも、個別言語学の研究として、台湾諸語の研究、朝鮮語の研究の論文が寄稿されている。そして、第1巻同様に、明らかに言語学以外の分野として、近世国学者の研究がみられた。また、表2を考察すれば分かるが、国語国文学、梵語学、漢文学、中国語学等、中国語学を除けば、言語学の範疇に含まれない研究テーマに関する論考がみられたのである。

表2からも分かるように、『言語学雑誌』第2巻、第3巻にも、現代言語学の研究テーマには含まれない国語国文学の研究、梵語学、漢文学等の論文が掲載されていることから、この段階では、「言語学」は未だ研究内容の輪郭が不明瞭であったと考えられる。特に、国語学に関わる論考は、現在なら国語学、日本語学関連の学会に寄稿すべき論文といってもよいであろう。

しかしながら、現代言語学の研究テーマに相通じる個別言語学、社会言語学、方言学等の研究も詳細に行われていたことから、日本における近代言語学的観点からみると、徐々に「言語学」という研究分野が黎明期から、確立期に移行する過渡期であったと捉えることができる。

表2『言語学雑誌』第2巻と第3巻の主要な分野別リスト
(著者・研究分野・巻号数・題目)

著者・研究分野	巻号数	題目
各諸言語に関する研究		
白鳥庫吉 (1865 - 1942)	第2巻第1号	再び朝鮮の古語に就いて
小川尚義 (1869 - 1947)	第2巻第2号	ファボラング語に就て
(承前、完結)		
国語国文学		
岡澤鉦次郎 (1870 - 1944)	第2巻第1号、第3号、第5号	日本文典におけるの詞論 (承前)
近世の国学者の研究		
平出鱈二郎 (1869 - 1911)	第2巻第1号	谷川淡齋肖像附記
言文一致		
藤岡勝二 (1872 - 1935)	第2巻第4号	言文一致論
同上	第2号第5号	言文一致論 (承前完結)
エルンスト・エドワーズ	第2巻第4号	言語改良と言文一致
同上	第2巻第5号	言語改良と言文一致 (承前完結)
梵語学		
常磐井堯猷 (1872 - 1951)	第2巻第1号	プラアクリット語に就て
同上	第3巻第1号	「阿伽」の梵語に就きて
漢文学		
岡井慎吾 (1872 - 1945)	第2巻第1号	論語徴にあらはれる音韻論
中国語学		
金井保三 (1871 - 1917)	第2巻第4号	馬氏文通に就て
英語教授法		
八杉貞利 (1876 - 1966)	第2巻第2 - 4号	スキート氏の語學教授法
国語教育		
上田萬年 (1867 - 1937)	第3巻第2号	國民教育と國語教育
同上	第3巻第3号	國民教育と國語教育 (承前完結)
社会言語学		
岡野久胤 (1874 - 1944)	第3巻第2 - 3号	標準語に就きて
音声学・音韻論		
新村出 (1876 - 1967)	第3巻第2号	音韻變化の死活
方言学		
新村出 (1876 - 1967)	第3巻第3号	方言の調べ方に關する注意 (上)

4.2 『言語学雑誌』に寄稿した研究者について

本節では、拙稿 (2017a) の調査で明らかになった『言語学雑誌』の研究者と本稿の4.1の表を参考にして、当時、言語学者以外のどのような人物が、「言語学」という新しき学問の樹立に貢献しようとしていたのか、考察してみたい。

『言語学雑誌』に寄稿した人物とその専門分野を考察することによって、当時の「言語学」がどのような学問を目指していたのか、さらに、現代言語学との関係性を明確にしたい。

表 3 『言語学雑誌』における言語学以外の専門分野の研究者一覧
(著者・専門分野・巻号数)

著者	専門分野	巻号数
高楠順次郎 (1866 - 1945)	サンスクリット学	第1巻第2号-4号、第10号
武笠三 (1871 - 1929)	国文学	第1巻第3号
神保小虎 (1867 - 1924)	地質学・鉱物学	第1巻第6号
吉丸一昌 (1873 - 1916)	教育者・唱歌の作詞者	第1巻第6号
白鳥庫吉 (1865 - 1942)	東洋史学	第1巻第3-5号、第2巻第1号
岡井慎吾 (1872 - 1945)	漢文学	第2巻第1号
常磐井堯猷 (1872 - 1951)	梵語学	第2巻第1号・第3巻第1号
岡澤鉦次郎 (1870 - 1944)	国文法	第2巻第1号、第3号、第5号
平出鱈二郎 (1869 - 1911)	国文法史・風俗史研究	第2巻第1号
高木敏雄 (1876 - 1922)	比較神話学・民俗学・ドイツ文学	第1巻第5号・第2巻第3号
金井保三 (1871 - 1917)	国文法・中国語学	第1巻第9号・第2巻第4号

上記の表3から分かるように、『言語学雑誌』が刊行された頃には、現代言語学の観点からみると、未だ言語学の分野の輪郭が定まっていないことを窺うことができる。また、言語学以外の異分野、国語国文学、梵語学等の研究も包摂しようとしていたことに気づくことができる。特に、『言語学雑誌』に国語学を導入する考えは、特筆すべき事項といえる。拙著(2013)でも論じたように、藤岡勝二は、『国語研究法』(三省堂書店、1907)において、言語学の理論、言語学者、言語学の当時の最新の理論を掲げながらも、タイトルに「国語」という名称を冠した著書を上梓している。この頃の藤岡は、「言語学」の理論と「国語学」との連携を模索していたと考えられるのである。

5. おわりに

本稿では、日本における近代言語学史の観点から、言語学会の機関誌『言語学雑誌』の資料的価値を考察した。『言語学雑誌』の調査については、これまで、拙著(2013、2017b)や拙稿(2017a)を通して、様々な言語学的観点から検討をしたが、全貌を解明するには至らなかった。こうした状況を憂慮して、未だ不明であった箇所を中心に、さらに詳細な考察を試みた。第1巻については、言語学者藤岡勝二を枢軸におき、かなり綿密に論じたが、本稿では、第1巻以外の第2巻、第3巻を中心に考察した。

上記の調査の結果、第1巻でもみられたように、『言語学雑誌』には、比較言語学、音声学等の現代言語学の研究対象となるテーマが含まれていると同時に、国語国文学、梵語学、漢文学等、他分野の研究テーマの論考も散見できることが判明した。そして、当時は、一言語学徒であったが、後に、各分野の泰斗となる数多くの学者たちが寄稿していることも窺うことができた。拙稿(2017a)では判明できなかった事項も、本稿の考察を通して、明らかになった事実もあった。例えば、この頃、すでに国語学者岡田正美が、『言語学雑誌』の「論説」の中で、「待遇法」という論文を寄稿し、「待遇」に関して、体系的な持論を展開していたことである。勿論、現代言語学の観点からみれば、稚拙な内容であるかもしれないが、本研究は、現代言語学の研究テーマの「待遇表現」研究に継承されていると考えられる。この点では、岡田の論文は、この分野の嚆矢と考えられる。また、個別言語学においても、言語学者藤岡勝二をはじめとするアルタイ諸語研究に先立ち、アイヌ語の研究、台湾諸語の研究が行われていたことも窺うことができた。

上述してきたように、拙著(2013、2017b)や拙稿(2017a)においては、詳しく考察できなかった箇所も、本稿において、様々な観点から検討することによって、新たな事実が判明した。しかしながら、紙幅の関係上、『言語学雑誌』の全貌を明確にするまでには至らず、さらに、詳細な調査が必要になる課題もみられた。『言語学雑誌』は、たった18冊しか刊行されていないが、日本における近代言語学の誕生に寄与した論文が、数多寄稿されているのである。「博言学」から脱し、新しき「言語学」という学問が誕生しようとする過渡期の中で、近代言語学にも通じる研究テーマで論文が寄稿されていた点は、特筆できる事項といえよう。『言語学雑誌』は、徐々に「言語学」という学問分野の輪郭が定まりつつある途上において、きわめて貴重な言語資料を有する文献とみなすことができる。同時期には、藤岡勝二や岡田正美も編集人を務めた『帝國文学』、さらに『東洋學藝雑誌』も刊行されていたが、『言語学雑誌』が、当時の言語学の実態を最も表しているといえよう。

上記の点に鑑みると、明治31(1898)年に、上田萬年の弟子が中心となり結成された言語学会、その後、明治33(1900)年に創刊される『言語学雑誌』は、日本における近代言語学史において頗る資料的価値をもつ文献であることを窺うことができる。言語学会自体は、確かに、上田萬年の弟子が中心となって結成されたが、機関誌『言語学雑誌』は、第二代東京帝国大学文科大学言語学科教授の藤岡勝二が、最後まで編集人を務め、実質上の中心的存在となって創刊されたのである。既述したように、『言語学雑誌』は、第1巻第10号、第2巻第5号、第3巻第3号という合計18冊しか刊行されてはいない。藤岡、八杉の留学によって休刊を余儀なくされ、終に第3巻第3号でその役割を終え、廃刊となった後は、言語学会も散会する。しかしながら、『言語学雑誌』の資料的価値は、近代言語学を知る上で、刮目すべき貴重な文献といえるのである。

『言語学雑誌』は、現代言語学界が確立する過程を理解する上でも、第一級の学術雑誌であり、今一度見直されるべき頗る資料的価値を有しているのである。

注

- 1) 現代言語学では、ウラル・アルタイ語族は、ウラル語族とアルタイ諸語に峻別される。アルタイ諸語には、モンゴル語、チュルク諸語、満州・ツングース諸語が含まれるが、この系統関係が、「アルタイ語族」として認める段階には、未だ至っていない。
- 2) 岡田(1900b)は、様々な語彙を掲げているが、ここでは、5つのタイプ(敬、平、謙、倣、卑)が全て揃っている「食べる」という語を取り上げた。
- 3) 『言語学雑誌』第1巻第6号の「雑報」のp58より引用した。
- 4) 『言語学雑誌』第3巻第3号の「雑録」のp51より引用した。

引用文献

- 大澤岳太郎(1898)『日本婦人待遇論』南江堂
- 小川尚義(1900)「厦門語族に就て」『言語学雑誌』第1巻第6号 寶永館書店 pp.30-38
- 小川尚義(1900)「ファボラング語に就て」『言語学雑誌』第1巻第10号 寶永館書店 pp.1-10
- 小川尚義(1901)「ファボラング語に就て(承前、完結)」『言語学雑誌』第2巻第2号 寶永館書店 pp.143-157
- 岡田正美(1900a)「待遇法」『言語学雑誌』第1巻第5号 寶永館書店 pp.18-29
- 岡田正美(1900b)「待遇法(續)」『言語学雑誌』第1巻第6号 寶永館書店 pp.32-39
- 柿木重宜(2004)「チャレンジコーナー(ジュニア版 シニア版)」『月刊 言語』第33巻第3月号-第33巻第8号 大修館書店
- 柿木重宜(2013)『近代「国語」の成立における藤岡勝二の果たした役割について』ナカニシヤ出版
- 柿木重宜(2017a)「近代「言語学」成立事情：言語学者藤岡勝二の役割を中心として」『関西外国語大学研究論集』第105号 pp.1-19
- 柿木重宜(2017b)『日本における近代「言語学」成立事情I—藤岡勝二の言語思想を中心にして—』ナカニシヤ出版
- 金澤庄三郎(1910)『日韓兩國語同系論』三省堂書店

- 木村哲也（2003）「近代『日本語』創出のアポリアー『言語学雑誌』にみる「言語学」のイデオロギー」
『杏林大学研究報告－教養部門』第20巻 pp.71-82
- 言語学会（1900-1902）『言語学雑誌』 富山房
- 小林英夫（訳）（1972）『一般言語学講義』岩波書店 [Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*,
1916, Payot, Paris.]
- 神保小虎・金澤庄三郎（1898）『アイヌ語會話辭典』金港堂書店
- 神保小虎（1900）「アイヌの日本語」『言語学雑誌』第1巻第6号 寶永館書店 pp.1-5
- 高橋順次郎（1900）「日本字書の完成（承前）」『言語学雑誌』第1巻第2号 寶永館書店 pp.133-150
- 藤岡勝二（1907）『國語研究法』三省堂書店
- 藤岡勝二（1921 - 1932）『第英和辭典』第1巻、第2巻 大倉書店
- 八杉貞利（1900）「アイヌ語斷片」『言語学雑誌』第1巻第6号 寶永館書店 pp.39-44
- 八杉貞利 和久利誓一（編）（1970）『新縣居雜記』吾妻書房
- 山本正秀（1967）「『言語学雑誌』と言文一致」『國語と國文学』第44巻 東京大学国語国文学会（編）
至文堂 pp.47-66

（かきぎ・しげたか 外国語学部教授）

